

海外留学（短期プログラム）参加報告書

所属：法政経学部

プログラム名：リンショーピン大学サマースクール

期間：1 か月間（7 月 1 日～30 日）

私は、スウェーデンのリンショーピン大学で行われたサマースクールプログラムに参加しました。以前も BOOT プログラムで台湾へ、GSP でフィンランドへ、それぞれ 2 週間の留学経験があり、もう少し期間の長いプログラムに挑戦してみたいという気持ちと、千葉大生と一緒に参加するのではなく日本語の使えない状況に単身で乗り込んでみよう、という思いから参加を決めました。また、自分の学部での研究テーマである福祉や、女性の育児と労働の両立を考えるうえで、このような分野の先進国にぜひとも行ってみたいという興味から、スウェーデンを選びました。



参加を決定してから、英語の講義の聴講やイングリッシュハウスでレッスンを受けて自分の英語力の向上を図ったのはもちろんのこと、現地大学とのメール、航空機の手配、現地大学への参加費の振り込み、さらには千葉大の教授との単位認定の交渉、学務での渡航の手続きなどといったような事務作業など、やらなければならない準備が非常に多くありました。また、今回の参加にあたっては、サマースクールの開催時期が 7 月ということもあり、大学の学期制度が 6 ターム制に変更したことが一番ありがたいことでした。

サマースクールの参加者は約 120 人で、アジア、ヨーロッパ、アメリカと様々な国籍を持つ学生たちが参加するものでした。日本からの参加者は私を含めた 3 人で、全員別々のクラスに所属していたためほとんど会う機会もなく、ゆえにこの 1 か月間はほとんど日本語の使えない 1 か月でした。この期間、サマースクール生は基本的に平日の昼間は大学で講義を受け、放課後や休日には現地学生のスチューデントホストが企画してくれるイベントに参加しました。

私は「ヘルスケアと起業家活動」のクラスに所属していました。このクラスは 17 人の学生が所属しており、いわゆる講義はもちろんのこと、教授と学生の対話型の授業やグループワーク、少人数の討論型の講義やプレゼンテーションといった、受け身ではなく学生が主体になるプログラムがたくさんありました。もちろん使用言語は英語なので、私にとっては非常に困難でした。日本の状況を伝えたり、日本人としての意見を述べられるのは私しかいないのに、語彙力が乏しく、また即座に英語で返答することもできないために、十分に伝えたいことが伝えられないもどかしさを痛いくらいに感じました。また、最終課題として 3000 字の英語レポートの提出とそれに関するプレゼンテーション発表が課され

たのですが、これは私にとって最大の困難でした。最後の 1 週間は毎日パソコンの前で奮闘していました。レポートの作成に当たっては、クラスの友達が正しい英語を教えてくれたり、文章の推敲をしてくれたおかげでやり遂げることができました。

スチューデントホストが企画してくれたイベントとしては、伝統料理のスウェーデンミートボールを作るイベントや、スウェーデン流のバーベキュー、ジムでのフロアボールやストックホルムへの 1 泊 2 日の旅行などがありました。どのイベントもスウェーデンの暮らしや文化を知るうえでとても役立つものであり、サマースクール生同士が仲良くなるうえで大事なイベントでした。

また、私は特に仲良くなった友達と 4 人でストックホルムへ泊りがけの旅行に行ったり、IKEA に買い物に行ったり、自国の伝統料理を持ち寄ってパーティーを開いたり、コスプレのイベントに参加したりと非常に充実した時間をすごせました。



スウェーデンの街に出てもっとも驚いたことは、平日の昼間でもいたるところにベビー

カーを引く男性の姿が見られたことでした。同時に、マーケットの店員やバスの運転手、警察官など働く女性の姿を多く見かけました。日本にいて、スウェーデンの男性の育児休暇取得率のデータを集めたり、関連する写真を見ることはできるけれど、こんなにも当たり前のように見られる光景だと思っていなかったため、衝撃的でした。

今回の留学を通して最も強く感じたことは、日本は他国の人たちに好意的にとらえられている、ということでした。多くの人が、日本の食文化やアニメやドラマ、日本語のあいさつを知っており、私が日本人だとわかると自分の持っている日本の知識を伝えようとしてくれました。これは、日本人としてとてもうれしいことであり、同時に、英語をきちんと使えなければこのようにせっかく日本に興味を持ち、日本について知りたいと思っている人たちと会話をするできないのだということに気付きました。だからこそ、もっと英語を勉強したいと強く思いました。



1 か月間という短い期間でしたが、私にとっては毎日が新しい発見にあふれた中身の濃い時間でした。このような経験を後押ししてくれたすべての人に感謝したいと思います。